

(1) 単元名：「何倍でしょう。」

(2) 本時の目標： $\square \times A \times B = C$ 、の関係のある問題をいろいろな考え方で解くことを通して、「何倍になるかを考えて」解く方法のよさを理解する。

〔 国頭村立北国小学校の校内研修 〕

昨年度より、川口校長先生が中心となって、へき地の少人数での「学び」への挑戦である。北国小は職員と校長先生が、まさに一丸となって「学びの共同体」の理念の遂行と、授業創りに取り組んでいる。先月の5月には川口校長が自から算数のモデル授業を実践し、「同僚も互いに学び合う」を管理職の校長として示してくれた。

本日の校内研修には、近隣校の佐手小学校の教師も参加してくれた。日頃から集合学習等で常に交流が交わされているが、昨年度より、校内研修の交流も活発に行っている。



【参観者 8名。児童 3名】

☆文中の児童生徒の名前は全て仮名である。

0:00 淡々と和やかに授業が始まる



北国小学校の4年生は1名である。北国小と佐手小では授業の学習効果（「学び合い」）を少しでも多様な考えとの出会いを図る意図として、週2回、集合学習における算数の授業が実践されている。

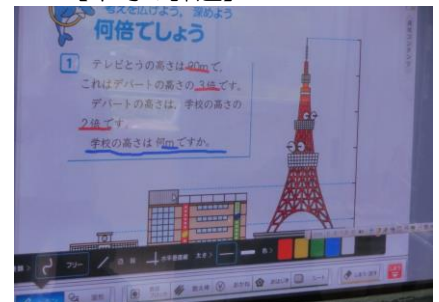
本時も、北国小の4年生の大和さん、佐手小の光さん、文香さんの3名で「学び合う学び」の授業への挑戦である。ちなみに北国小の大和さんは、25年度4月になって北国小に転入してきたばかりである。佐手小の2名は昨年度より「学び」の授業を経験しており、訊き合う、支え合うがかなりのレベルで身につけている。学びの共同体の理念である「一人残らず」にこだわる教師が、大和さんを2人の仲間うまくつなげることができるか？・・・私、個人としての見どころでもある。

1:00 【課題の提示】



国頭村内のへき地の先生方にとっては定番の授業風景である。少人数の授業では、このデジタルテレビとデジタル教材が実に有効的に活躍する。教師は、課題を子どもに音読させるが、じつにたどたどしい読みである。それでいい。すらすら読めることが目的の授業ではない、子ども

【本時の課題】



が、自分なりにしっかり読んで、課題を把握することが大事である。「たどたどしい」は、僕なりにしっかり「分ろうとして」読んでいる証でもある。

3:00 【ワークシートの配布から、まずは自力解決で挑戦】



写真①



写真②

教具の工夫。この段階でまだ子ども達は教科書を見ていない、写真①のワークシートは課題をB5の用紙（上段）にコピーし用紙の下段に広くスペースを設け子ども達の考えや記録ができるようにしている。教科書の課題文をノートに書き写す時間より「考える」「学び合う」に時間を要したい教師の意図と教具の工夫である。

写真②、ワークシートの問題に集中している3名である。手前の大和さんは、時々、宙を向いて何か「ぶつぶつ」つぶやいていた。…このつぶやきが大切なんです。何かを「訊きたい」「確かめたい」の現れです。教師は、つかさず大和さんのつぶやき「訊きたい」を2人の仲間につなげた。素晴らしい。ここで教師は、ヒントを与えたり、やり方を示したりせず「仲間につなぐ」という行為が大切である。後は子ども達のやり取りをしっかりと見守ることが肝心。

子どもは、「自分たちで解決を図りたい。」そう思っている。先生の話やヒントをもらって考えるよりも、まずは自分たちの力で解決を図りたい。共同は「達」である「仲間達」と分かり合いたいを大切にしたい。

7:40 【 教師が「つなぐ」】



写真③



写真④



写真⑤

最初の課題で、ぶつぶつぶやいていた大和さんを、向かいの光さんに教師はつないだ。互いに「訊き合う」が交われ「学び」が深まる。静かでしっとりした息づかいを感じる。決して見下したり、否定的な声は交わされない、相手の考えを深くに聴き、訊かれたことには素直に一緒に考えてあげている。写真④、自分のワークシートを光さんに見やすく差し出す大和さん、「ほー」大和の考えを認める光さん。写真⑤、手を差しのべる光さんに素直に聴き入る大和さん。しっとりした「学び合い」の空気が教室を包む。さらに、教師は余計な言葉は発せず、静かに二人のやり取りを見守っていた。ただ見ていたのではなく、教師の視線は常に二人の仕草や顔の表情を見ていた。これまでだと、二人の会話の中に教師が入り込み、教師の話で考え方に導き、ワークシートや教科書を指さし、時にはヒントまで与え子ども達をより速く、正確に解答に至る指導をしてきた。さて…？

【教師が互いに学ぼう】：教師の「間」の使い方が絶妙であった。「考えさせる『間』」・「待つ『間』」さらに『つなぐ』行為である。子どもの表情をうかがう姿勢も見習いたい。

11:30 【共有する】



教師は3人の中から、大和さんの考えを共有させた。最初とんでもない間違いをしていたが、自分で気づき修正した。ここで気づきがあったのも仲間達のおかげである。教師は意図的に「間違い」も語らせ共有した。「伝える」が仲間に向けられていることにも目を向けたい。

15:00 それぞれの考えを図と言葉で説明しよう。



写真⑥

ホワイトボードをそれぞれに配布し、自分の考え方を記す。教師のちょっとした工夫とアイデアが活かされる。「学校」「デパート」「テレビ塔」のカードは配布される(写真⑥)。写真⑦、自分の考えを語る。写真⑧、仲間の考え方と自分の考えを比べる(すり合わせ)。教師はほとんど語ることはしない。子ども達の声にただ淡々とうなずいていた。



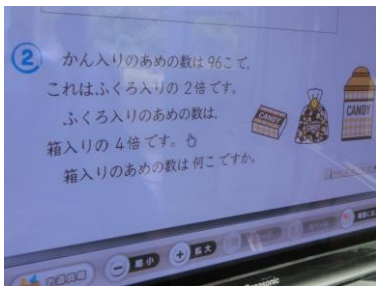
写真⑦



写真⑧

26:00 【ジャンプ課題へ】

教師は教科書の問題をジャンプ課題に採用したが、課題のレベルは教師が、子ども達の実態と能力に応じて設定すればいい。肝心なことは「簡単でないこと」である。学び合う必然性が発生するレベルを設定する。



ここで教師は大和さんに説明させる。先ほどの光さんの説明の仕方を模倣させたい教師の意図がうかがえた。

【教師の発問】

教師：「だから」を使って説明してね
教師：なぜ「÷」を使ったの？

【1枚の写真】

早く終わった男の子二人が、文香さんが書き終わるまでじっと待つ時間があつた。その時の二人の視線はしっとり文香さんに注がれていた。言葉にしない「頑張れ、大丈夫？」の声が私には聴こえた。「待つ」の心づかいである。

42:00

【授業終末】

本時の課題を教科書で確認した。さらに簡単に今日の授業の感想を語らせた。最後に教師は、大和さんの「まちがい」をほめて授業は終了した。

